

ケースで学ぶ 日常みる角膜疾患

西田輝夫 著

本書は、著者が長年たずさわってこられた角膜疾患診療について症例を中心にまとめられており、一般臨床医にもわかりやすい内容となっている。

著者は生化学者としてそのキャリアを始められ、その後研究の素材としての眼球に魅せられて眼科臨床へと歩んでこられた方で、われわれ一般の眼科医とは違う異色の経歴を持っておられる。基礎研究者としての確固たる地盤をもとにして、著者が角膜研究の世界のトップを走ってこられたことは、読者の皆さんもよくご存知であろう。ただ、基礎研究者は物事の本質を究めようとするあまり、常に原理から入ろうとする性癖があり、実地臨床からは少しかけ離れてしまう危険性がある。

ところが（案に相違してと言うと失礼かもしれないが）本書はどの項目もまず症例から始める体裁をとっており、しかもなかには従来の書籍ではあまり取り上げられなかった非典型的な症例や複合的な症例（56頁の起炎菌不明の角膜感染症や97頁のアトピー性角結膜炎のMRSA感染合併など）も取り上げている。確かに実地臨床で多いのはまさにそのような症例であり、本書でこれらの症例を取り上げることによって本書の実践的なアプローチがより明確になっている。また、本書には「ステロイド関連角膜障害」や「角膜蜂刺症」「甲状腺眼症」「ティーエスワン®による角膜上皮障害」など他の角膜関連の書籍ではこれまで取り上げられてこなかった項目があるのもユニークであり、これも実地臨床重視の表れであろう。

ただ、そうはいっても本書では原理的なこともきちんと押さえられていることは言うまでもなく、症例に続いて疾患の定義や疾患概念が遺漏なく明確に記載されており、その疾患の歴史的な由来もわかるようになっている。引用文献も原著論文を中心にしっかりとなされており、多数掲載されている鑑別のための表やフローチャートも原理的であるのと同時に非常に実践的

な内容で役に立つ。

本書は著者の教室の若い方たちの執筆協力を得ているとはいえ、単著で出版されており、多くの類書が網羅的ながら個性のないマニュアル的なものとなりがちな昨今、随所に著者の角膜診療に対する哲学を垣間見ることができる。特に著者がその治療法の開発に心血を注いできた「遷延性角膜上皮欠損」「神経麻痺性角膜症」などの角膜上皮障害については、フィブロンectin点眼やFGLM-アミド+SSSR点眼などの上皮障害の原理を見据えた治療がわかりやすく紹介されており、対症療法ではなく病態を見据えた治療の重要性が改めて認識される。また、角膜のみならず涙液・眼瞼・結膜などの角膜を取り巻く環境の異常に目を向けることの大切さも強く印象付けられる。そして、新しい検査法であるレーザー生体共焦点顕微鏡やScheimpflugカメラなどの美しい画像が随所に配され、角膜の構造を細胞レベルから形状まで多面的に理解することの重要性が強調されている一方で、古い検査である角膜知覚検査や塗抹検鏡検査の重要性もきっちりと書かれている点も、著者の角膜検査についての考え方を反映しているものと思われる。

角膜ジストロフィや角膜移植後の問題点の章などで、少し内容に重複があるのは単著としては惜しいところであるが、著者が別に上梓した『角膜テキスト』（エルゼビア・ジャパン刊）とともに、本書を角膜専門医あるいは広く眼科臨床医の座右の書とし、本書の序章でも述べられているように「究極の目的は透明性の確保と形状の維持」を達成していくのに大いに活用したいものである。

鳥取大学教授・眼科学 井上幸次

B5 頁320 2010年

定価 16,800円（本体 16,000円＋税5%）

[ISBN978-4-260-01017-7] 医学書院刊